

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭

澤井園子

相聞の歌

(巻第十三 三二六七番歌)

明日香川

瀬瀬の珠藻の

うち靡き

情は妹に

寄りにけるかも

久しぶりにひとり旅に出た。「たび」とは、古くは必ずしも遠方に行くことのみを言わず、住みかを離れて一時よそへ行くことをすべて「たび」と言ったそうだが、「旅行」とは違うこの響きが気に入っている。知らない街を歩く。地図を頼りに東へ西へ。日本中に山も川もあるけれど、その地域で全く違う表情がある。そこに身を置くと、いつも以上に自然に魅了され、細胞の中からワクワクした気持ちがあふれてくる。まさに脱日常。美味しいものに吸い寄せられては一休み。土地のものをいただき、土地の人とふれあい、そこで大切にされているものを愛でる。旅では日頃の「ねばならぬ」ことがない、むしろ、できない。ある意味「あきらめの時間」でもある。それは実は日々、必要不可欠な時間なのかもしれない。とっておきの自分だけの時間、そして、大切な人に想いを馳せる時間として。

藻とは、水中に生える海藻・水草の総称で、万葉集で玉藻（珠藻）は五十首以上詠まれている。沖に生える「おきつも」、岸辺の「へつも」、川に生える水草の「かはも」など、生える場所でいくつもの言葉が生まれている。また、「玉」というのは人間を守り助ける働きをもつ精霊のよりしるである。丸い石や宝石も玉という。そこから「魂の宿る」「神聖な」という意味や、美し

さを表す接頭語となった。さらに玉藻刈る、玉藻なす、玉藻なびくと多様な表現がある。波のうねりになびく海藻は女性の黒髪を彷彿とさせた。藻が流れにもつれ合う姿は共寝をイメージさせ、玉藻を刈る情景は旅先の優美な情景につながった。明日香川の瀬は速い。流れの中にいて、心はまなならない。恋をしたらもう止められない。この歌は、冒頭の広大な明日香川の情景から流れの中の玉藻にぐつと寄り、美しい人の黒髪、共寝が浮かばれ、心が惹きつけられてどうしようもない愛しさへと広がっていく。「明日香川の瀬々の玉藻が流れに靡き寄せられるように、心は妻に、こんなにも寄ってしまったことよ。」明日香（飛鳥）川は、奈良県明日香地方を流れる川で、奈良県高市郡の高取山を源として大和川に入る。写真の歌碑は、奈良県高市郡橋本の飛鳥川沿いにある。

川に出た。清らかな流れはずっと見ていたくなる。時を忘れ、今ここにいることを堪能したくなる。ふと、たくさんの奇跡の中で生きていることを思う。うれしいこともある。悲しいことも訪れる。ただ目の前のことに必死になつた日、穏やかに何事もなく終えた日もある。人生という流れの中のこの一瞬を、思いのままに楽しみたい。どこにいても何度でも、今ここから始めたい。眺める山に川に、草に花に、鳥に風に、元気をもらいながら。



奈良県高市郡明日香村岡橋本の飛鳥川淵にて